

大学院に行こう

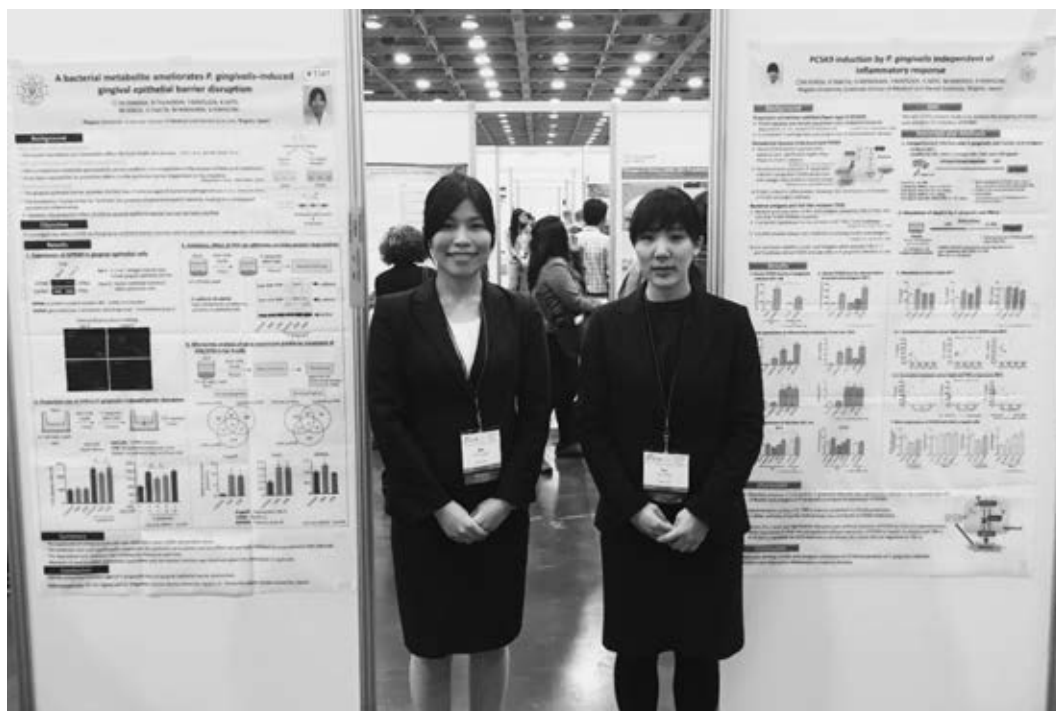
歯周診断・再建学分野 山田実生

はじめまして、歯周診断・再建学分野大学院4年生の山田実生です。今回原稿執筆依頼をいただきましたので、私が大学院進学を決めたきっかけや、これまでの大学院生活を振り返っていきたいと思います。将来のことを考え始めた学生さんが大学院を選択してくれる一助になれば嬉しく思います。

私は新潟市出身ですが、北海道大学歯学部に進学しました。学部生時代に大学院進学を勧められたこともありましたが、学部と合わせて10年間を大学生として過ごすことは考えられず、漠然と開業医で働く未来を想像して地元新潟大学医歯学総合病院のAコースで臨床研修を行いました。

研修中はやはり臨床指向が強くなり、はやく経済的にも独立したいという思いも手伝って、開業

医に勤務するつもりでいました。しかし大学で県外に出ていたこともあり知り合いの先生はおらず、もしここで決めてもその先生と合わなかったらきちんと学ぶことができないのではないか、と思い悩みなかなか勤務先を決めることができませんでした。次第に、歯科医師としての基盤となる考え方や、人間関係をしっかりと築きたいと思うようになり、大学院進学を考え始め、各科の説明会に参加して歯周科へ入局する道を選びました。歯周治療は歯科治療のスタートに位置し歯科治療の基盤であるのみならず、歯周疾患の管理が生活習慣病の予防に寄与できること、歯周一全身プロジェクトの研究成果が新聞に取り上げられていたこと、大学ならではの手術症例に多く触れられること、そして経済的に独立することも可能と伺っ



アメリカで行われた国際学会にて同期と。筆者は左

たことが大きな決断の理由になりました。

さて、大学院に進学するとまず臨床に関して心配する方も多いと思いますが、歯周科の場合は、多くの症例に触れることができます。自身では認定医取得に向けた患者を担当しますし、指導医や先輩方の外来診療・手術のアシストをしながら間近で見せていただき勉強することができます。さらに毎週の医局会では学生症例や、先生方の症例報告があり、治療方針や実際の経過などを見ることができ、根拠を持った治療計画立案をしっかりと学ぶことができます。

次に研究って何をしたらいいのかわからない、と躊躇っている方も多いと思います。私自身もその一人でした。しかし、研究テーマをいただき、疑問点を挙げそれを明らかにする手技の一つ一つから解析方法、学会発表に至るまで、指導医の先生をはじめ先輩方に懇切丁寧に指導いただきました。そして、これまでに国内外の学会で4回発

表させていただき、第65回国際歯科研究学会日本部会（JADR）総会・学術大会においては2017年度JADR/GC学術奨励賞をいただくこともできました。ご指導いただいた先生方には心より感謝申し上げます。

自分は教授になりたいとか海外に留学したいとか、はっきりとした目標がなくても大学院に入ってみると様々な場面で各分野の優秀な先生方から学ぶことができたり、留学生と交流できたり、海外の学会に参加したりすることができ、自分の力だけでは成しえない、素晴らしい経験をすることができます。卒業後、また進路について迷う日が来ると思います。しかし今振り返ってみると、どの道に進むことになるとしても大学院で過ごした日々は何物にも代えがたく、進学してよかったと思います。進学を迷っているという方は是非大学院の扉を開いてみてください。



大学院に行こう

摂食嚥下リハビリテーション学分野 吉原 翠

摂食嚥下リハビリテーション学分野大学院3年生の吉原翠と申します。

「大学院に行こう」というテーマを頂きましたので、大学院での勉強や生活についてご紹介します。大学院への進学を考えている学生・研修医の皆さんの参考になれば幸いです。

私はもともと摂食嚥下に興味がありましたが、学生の頃は大学院への進学についてはあまり考えていませんでした。大学院での生活がどのようなものかも分からず、4年間学生として過ごすことに不安もありました。そのため、まず大学卒業後の研修先として新潟大学のAコースを選択し、歯科総合診療部で1年間の臨床研修を行わせていただきました。

総合診療部で研修させていただきながら将来について考えたとき、折角興味のある分野が新潟大学の講座にあるのだから、そこで摂食嚥下についてより深く学びたいという思いが強くなりました。また、先生方のお話を伺って研究に興味を持ったこともあり、大学院への進学を決めました。

大学院に入学してからは、まず病棟での患者さんの診療に参加させていただきました。

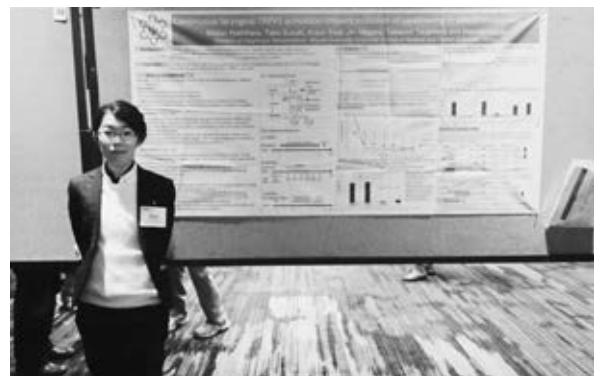
摂食嚥下リハビリテーション学分野では、複数の診療チームに分かれて嚥下障害のある患者さんを診療します。主に介入するのは入院中の患者さんですが、退院後も当院へ通院される方であれば、外来でのフォローを行う場合もあります。

嚥下障害の背景となる病態はさまざま、疾患について、またその疾患から嚥下障害が生じる原因についてなど、勉強することは非常に多くあります。摂食嚥下に関わることになった直後はもちろんのこと、3年生になった今もまだまだ勉強することばかりですが、先生方にはいつも丁寧にご

指導いただいています。

臨床の他、大学院生の重要な仕事として研究があります。先生方から与えられたテーマを通して、少しずつ研究の手順や思考の方法を学んでいきます。

私は動物実験を行っていますが、研究を始めたばかりの頃は動物の扱い方も器具の使い方も全くわかりませんでした。ですが、先生方や先輩がーから全て教えてくださり、徐々に一人で実験を行うことができるようになりました。学生の頃は基礎研究と臨床とは直接関係しないように思っていました。ですが、実際に自分で実験を行うように



国際嚥下医学会 (Dysphagia Research Society, DRS) (米国、ボルチモア) でのポスター発表



国際シンポジウム (タイ、サムイ島) での発表、筆者左。

なると、一つの事柄を説明するためにいくつもの仮説を立て、その証明のために多くの実験が行われているのだと知りました。

大学院への進学に関しては学費や期間の面から、躊躇することもあると思います。ですが、自

分の興味のある分野を深く学び、また学ぶ方法について習得できるこの時間はとても有意義なものであると思います。

もし大学院や研究について興味がありましたら、様々なハードルがあるかと思いますが、前向きに考えていただければ嬉しく思います。



大学院へ行こう

口腔生命福祉学専攻博士前期課程2年 渋木 瞳

口腔生命福祉学専攻博士前期課程2年の渋木瞳と申します。今回、「大学院へ行こう」というテーマを頂きましたので、大学院へ進学したきっかけや大学院生活についてご紹介したいと思います。拙い文章ですが、お許しください。

私は2017年3月に新潟大学歯学部口腔生命福祉学科を卒業し、その後、口腔生命福祉学専攻へ進学しました。現在は、摂食嚥下リハビリテーション学分野の諸先生方のお世話になりながら、病院で嚥下障害を持った入院患者さんの臨床に携わりながら大学院生活を送っています。

大学院というと研究をするところ、頭がいい人が行くところというイメージがありましたので正直、こんな私が行っていいものかと最初は躊躇しました。しかし、学部時代には摂食嚥下リハビリテーションについて勉強する機会があまりなく、この分野を勉強してみたいという考えがあり、お世話になっている先生方に背中を押され、大学院へ行くことを決意しました。

私の所属する口腔生命福祉学専攻は歯科分野だけでなく、社会福祉学分野についても広く学ぶことができるのが魅力であり、福祉分野の知識は臨床でとても役に立っています。同期には社会福祉士として働く仲間もおり、一緒に授業を受ける中で日々、刺激をもらっています。

さて、大学院生活で大きな割合を占めるのは研究だと思います。私の場合は入学してすぐに研究

テーマが与えられ、データ採取が始まりました。最初は右も左もわからない私に丁寧にご指導くださった先生方にはとても感謝しています。現在は、「身体的フレイル患者に対する歩行機能訓練は口腔・嚥下機能を改善するか？」というテーマで研究を進めています。データ採取の中で高齢者に関わる時間も大学院生活の中で楽しい時間があります。正直、研究といったものに最初はそこまで興味がなかった私ですが、研究を進めくうちに新しい知見を得ることができ、喜びを感じています。また、毎回ドキドキの学会発表ですが、他大学の先生の興味深いお話を聞くことができ、知識を深めることができます。そして何よりも自分の研究を客観的に見てもらえるので新たな目標を持つことができます。

早いもので大学院に進学して1年と3か月が経ってしまいました。私自身、大学院へ進学して自分の持つ世界が広がったと感じており、普通に就職したらできなかったことをたくさん経験させていただきました。このような素晴らしい環境で学べることに感謝しながら残りの大学院生活に励んで参りたいと思います。

最後になりましたが、大学院進学はお金も時間もかかるのでいいことばかりではありませんが、とても価値のある経験になると思います。進学について少しでも興味があるようでしたら、前向きに考えてみることをおすすめします。